
東方撃射伝～ロックオンが狙い撃つ～

名前募集中@淑女、氷武×黒兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方撃射伝〜ロックオンが狙い撃つ〜

【Nコード】

N6324T

【作者名】

名前募集中@淑女、氷武×黒兎

【あらすじ】

ロックオン・ストラトス。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターである。

彼は家族の仇であるアリー・アル・サーシェスと相打ちで死を迎えた。

そんな時、彼はふと目を覚ました。

ある屋敷にいる自分に、目の前に現れた女性はこう言った。

「貴女は幽霊なのよ？」

そんな彼が、幻想郷で巻き起こす！超武力介入系スタイリッシュア

クシヨン！

「ロックオン・ストラトス…狙い撃つ！」
ここに祝砲を上げよう。

プロローグ『時間を止めて』

因縁の男との相打ち。

そうして彼は最後を迎えた。

『よお、お前ら・・・まんぞくか？こんな世界で・・・俺は・・・嫌だね・・・』

案外、自分が想像していたよりずっと壮絶な死に方だった。

復讐ができて、イロイロ残すこともできた。

想像上ではあっけなく死んで誰も悲しまずに終わると思っていた。

この先の時代。

もう一度ソレスタルビーイングが戦うことになっても、刹那やティエリア、アレルやは紛争根絶にもう少し近づけるだろう。
なぜなら、彼らには種があるからだ。

死ぬのはもう、恐くない。

恐くない。

そう、恐くないんだ。

そのまま、彼は闇の中に意識を解放した。

プロローグ『時間を止めて』（後書き）

あとがき

プロローグですから。
何も言わずに次へと！！

mission 1『白玉楼』

彼、ロックオン・ストラトスことニール・ランディは目を覚ました。上体を起こす。どこかの屋敷。

純和風のそこ。自分は縁側で寝ていたらしい。

昔、日本歴史の本で覚えた言葉だ。

その本で今まで『日本』武士道』だと思ってた自分をぶん殴った記憶がある。

今思っても恥ずかしい。

日本』武士道なんてあるわけない。

そんなことを思いながら、縁側に腰をおろしたまま前方を見る。

大きな桜の木が立っている。

気付いた時には、呟いていた。

「綺麗だ」

「私もそう思うわ」

「ああ…って！」

隣りを見る。

すぐ隣りに、いつのまにか女性がいた。

自分よりは年下だろうが、大人の雰囲気がある。

ソレスタルビーイングで大人の女と言ったらスメラギしかいなかった。こういう女性は久しぶりだ。

「……聞きたいことがある、ここはどこで…お前は誰だ？」

三国の関係者だと思えないが、一応聴いておく。
自分はソレスタルビーイングのガンダムマイスターなのだ。
その重要機密を吐かせられるかもしれない。

「ここは冥界の白玉楼よ」

その言葉に、沈黙する。

ロックオンは頭を抱えて考えた。

冥界？

いや、聞き間違いに違い無いと、心の中で言い聞かす。

「もう一度言っわ、ここは冥界の白玉楼よ」

語尾に『』がつきそうな勢いで言う。

「（刹那、世界の歪みを見つけたぜ）」

この女性は酸素欠乏症かなにかだろうか？
言ってることがわからない。

ここから今すぐ逃げ出したいくなってきた。

「気付いてない？」

「は？」

「貴方、幽霊なのよ？」

その言葉に、背筋がゾツとした。

この女は何を言っているのだろうか？

もはや、歪みに歪んで、歪みが一回転で普通に帰ってしまっている。

「正確には、半人半霊…死んだ記憶はあるでしょ？」

「…そういやあ」

確かに、何を勘違いしていたのだろう。

自分が死んでいるほうが正常なのだ。

生きているより、死んでここは幽霊が沢山居る場所といわれたほうがよほど説得力がある。

「悪い、少し錯乱してた」

「大丈夫よ…幻想郷の住人でなければそうなるわ」

知らない単語が出てきた。

まあ、先ほどから知らない単語ばかりだったが、これは重要そうなので聞いておこうと思った。

「それって」

「まあ、待つて」

そう言うと、笑顔を向けてきた。

女にそんな笑顔を向けて無粋なことを言うのはロックオンとしても不本意だ。

桜を見ていると、背後から足音が聞こえた。

「あつ、起きたんですね」

そう言ってきたのは、白髪の少女。
少女はロックオンと女性の隣りにお茶を置くと、一礼した。

「私、魂魄妖夢と言います」

「ロックオン・ストラトスだ…日本じゃ名前がロックオンになるのか？」

「大丈夫ですよ、日本人以外もいますので」

そうか、と返事をして、女性を見る。

女性は笑顔を見せた。

穢れ無き純粋な笑顔だった。

「西行寺幽々子よ…ココの屋敷の主」

「ああ、よろしく」

そう言っていると、頷く。

「さて、まずは貴方のことね…多分、別次元の存在ね…なんらかの現象で死に掛けの魂と体がこちらに送られてきたけど、いまいち死にきれないか何かでここに現れたのね」

「俺は、初めからここで寝て？」

首を横に振る幽々子。

そして、指差す。

指は桜の木を指していた。

「あの桜の木の幹に寄りかかっていたのを、私が見つけたの」

ロックオンは頷く。

「ありがとな」

「いいえ…」

今まで見なかった自分の姿を見る。

髪を触ってみるが変わらない。

だが、服が違う。

いつもの私服に変わっていた。

最期はパイロットスーツだったはず。

眼帯はしっかりついている。

「あと、自分の右後ろを見てください」

妖夢の言葉に、見る。

驚いた。

そこにはオレンジ色の魂が浮かんでいた。

「なんだこりゃ？」

「それは、半霊です…半人半霊の自分の一部です」

妖夢を見ても、彼女の近くにも浮いていた。

それを凝視する。フワフワと浮いている。

「自分の一部ですから大事に扱ってくださいね？」

「ああ」

困ったように首を傾げるロックオン。

体の一部がこんなに堂々としていて良いのだろうか？

そんなことを考えながらも立ち上がってみる。

「妙に体が軽いな…」

「身体能力が上がったのよ、半人半霊だからじゃないかしら？」

その言葉に、納得する。

腕を振りかぶって、振る。

風を切るような音と共に、想像以上のスピードがでた。

自分でも少し驚きながらも拳を開いたり閉じたりしてみる。

「中々だな…悪くないけど、俺の現在状況はまだ説明し終わってないんだろ？」

そう言っただけで縁側に座る。

頷く幽々子。

そして、話しが再開された。

「貴方は正直言って死人に近いわ…ここ幻想郷で生きる以外に道は無い…といたいところだけど違うのかもしれない」

「どうということだ？」

「貴方のような存在は例外…半人半霊のままここに呼ばれた、それには理由があると思うの」

「それは？」

「幻想郷が、貴方を呼んだ」

その言葉に、後頭部をかいて困ったような顔をする。
そのまま体を倒して縁側に寝た体勢で聞いた。

「幻想郷ってのは？」

「その説明からね…妖夢」

「はい、まずはこのハジマリから…だいぶ長くなりますよ？」

外の太陽を見る。

太陽はまだ真上だ。話を聞こう。
そう思い頷く。

妖夢が話を始めた。

幻想郷の説明がされた。

多くの種族。人間、妖怪、吸血鬼、幽霊、妖精。
古き日本の村。人里。
スペルカードルル。

話を聞き終えたら、すでに日は落ちかけていた。
夕焼けを見て笑ってしまった。

「楽しくて聞き入っちゃった」

「あつ！す、すみません！」

「なに謝るなよ、話し方が上手かったって言ってんだから」

そう言うと、謙遜する正確の妖夢は嬉しそうに一礼する。

その姿を見て幽々子も嬉しそうにした。

話しの最中、少し雑談などもしたせいだろうか？

ずいぶん打ち解けたように見える。

まあ、それがロックオンの特技でもあろう。

他人と打ち解けるのに、ソレスタルビーニングで横に出るものは居なかった。

「まあ、アイツらは変わり者ばっかだったけどなあ」

「え？」

「いや…なんでもないさ」

そう言って、彼は背を伸ばす。

その時お腹の音が鳴る。

ロックオンでは無い、妖夢でも無い。

「お腹すいた〜！」

子供のようにそういう幽々子。
妖夢とロックオンが笑いだす。

「さて、晩御飯ですね」

そう言っておぼんにロックオンと幽々子の湯のみを乗せると立ち上がった。

「今日は泊まっていかれてはいかがですか？」

その言葉に、ロックオンは是非もないだろう。

しかし――

「いや、さすがに悪いと思うしなあ…さっきの話しからして…唯一の男だった爺さんは出てって、ここはお前達だけだろ？」

「はい、でも…ロックオンさんは何もしませんでしょ？」

笑顔で言われるその言葉。

それに、ロックオンは苦笑で返す。

妖夢も笑っている。

「その良い方は卑怯じゃないか？」

「いいえ、そんなことはありませんよ？」

そういう妖夢に溜息を吐く。
だが、悪くない。

「頼むわ」

「はい、お任せください」

そう言つて、妖夢は縁側を歩いてどこかに言つてしまった。
幽々子が立ち上がり、ロックオンの手を引く。

「じゃっ、行きましようか！」

「ちよつと待て！つと！」

引かれるままに、歩いていくと、襖を開く。
居間のようだった。

幽々子が3枚座布団を用意すると、バンバンと叩いてここに座れと促す。

「ふう」

息をついて座る。

机を挟んで向かいの幽々子が、笑う。

何を考えているかわからないが、危険な気がした。

襖が開いた。

「お待たせしました」

その細い腕で沢山の料理を運んでくる妖夢。
半霊の上にまで皿が乗っているところを見ると、相当な量なのだろうか？

「はい、まだありますよ」

「この家事はほとんど妖夢が？」

「いえ、専属の幽霊たちがやってくれてますよ」

背筋がゾツとする。

しかし良く考えてみると、自分も半分幽霊だ。
自分の半霊を見してみる。

なんだか八口を思い出す。

そして、妖夢が再び食事を抱えて帰って来た。

「ふう」

妖夢は息を吐いて座布団に座る。
これで完了なのだろうか？

「では、いただきますようか」

机を見る。そこに並べられた、大量の料理。
ちなみにほとんど肉。

魚と野菜も少々。

主食は幽々子だけ大量だ。

「圧倒的物量だな…俺はこんなに食えないぞ？」

「大丈夫です、幽々子様は食べます」

そう言つて、幽々子を見る。

楽しそうに両手を合わせている。

「まだ？」

妖夢が両手を合わせる。

知っているから、ロックオンも同じ行為をする。

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

一番が幽々子で二番三番がロックオンと妖夢だ。

ロックオンが食事を開始する。

日本風の料理というのも久しぶりだ。

「ん、うまいな」

「本当ですか、その煮付け私が作ったんですよ」

「ニツケっていうのか」

そう言いながら食べる。

そういえば、言語のことも考えていなかった。

日本語なんて覚えた覚えは無いが、日本語の知識が当たり前のようにある。

「まあ、気にすることじゃねえな」

もしかしたら、これも幻想郷の意思なのかもしれないと頷いて、食事を再開する。

十数分後。

食事を終えたロックオンが両手を合わせた。

「ごちそうさま」

そう言って、幽々子を見る。

まだ食べていたが、どんどん食べ物が無くなっていく。

まるで掃除機だ。『吸引力の変わらないたった一つの~~~~~』なんてCMが最新の掃除機でやっていた。

余談だが、その会社、ずっとそのフレーズで掃除機を売っているらしい。

「ごちそうさま〜」

幽々子が食べ終わるのに数分も必要なかった。
すると、机の下から何かを取り出す幽々子。

「じゃじゃ〜ん!」

それは、酒のようだった。

「あつ、幽々子様いつのまに〜」

驚いている妖夢。

しかも机の下から酒がいくつも出てくる。

「良いじゃない、せっかくお客さんがいるんだから…ね〜」

「あゝ…悪いな妖夢、俺も好きなんだよ」

そう言つと、妖夢は机にうな垂れた。

しかしすぐ頭を上げる。

「まあ、私も好きですけどね」

そう言つて、しかたないと笑う。

幽々子が嬉しそうに跳ねる。

「じゃ、飲みましょう!」

机の下から、お猪口が三つ出てくる。

ロックオンと妖夢が受け取ると、幽々子が注ぐ。

当初は遠慮していたが、妖夢もすぐ入れてもらっていた。

さすがに主人に注がせるのは罪悪感があったのだろうか？

「それにしても、日本酒は初めてだな」

そう言つて、酒を見る。

ワインと違って透明だ。

テキーラなどと同じ類だろうか？

「そうなんですか…ワインは無いんですよ」

「いや、悪いわけじゃないんだけどさ…」

そう言っ、お猪口を口につけて、ゆっくりと傾ける。
それを一口飲む。

パイロット時代はあまり飲めなかったアルコール高濃度の酒だ。

熱い感覚が喉から流れ込んで体に充満するのがわかる。
『五臓六腑に染み渡る』とはこのことかと、理解した。

「っ…効くなあ…これは美味しい」

その言葉を聞いて、妖夢と幽々子が嬉しそうに笑う。
ロックオンはその二人に笑顔で返した。

「そうだ、乾杯だったな」

そう言っ、お猪口を向ける。

三人のお猪口がこつんとぶつかる。

「乾杯」

「乾杯」

「乾杯」

三人の言葉が同時に放たれた。

こうしてロックオンは、幻想郷での一日。
半人半霊としての一日目を越えた。

mission1『白玉楼』（後書き）

あとがき

どうでしたでしょうか！

そう！半人半霊！

これがやりたかったあゝ！

死んだのならこれで良いだろうという作者の甘い考え。
ですがゝ！楽しんでいただけたなら幸いです。

これからいろいろな展開がくりひろげられていきます。

次回もお楽しみにゝ！！

mission2『人里』

翌日、頭痛で目が覚めたロックオン。
頭を押さえながら上体を起こす。
妖夢がうなされていた。

辺りを見回しても、幽々子が居ない。

疑問に思いながら机を見ると、自分が昨日使っていた湯のみに水が入っていた。

昨日は全部飲み尽くしたはずだと思い出す。
だが、汲んだ人物は一人居る。

「幽々子か」

そう言って、心の中で感謝しながら飲む。

「さて、今日はどうするか」

「人里に行きましょうか？」

いきなり背後から声が聞こえた。

バツ、と振り返ると、そこには昨日と同じように笑顔を浮かべる幽々子。

さすが幽霊と、感心しながらも自分もそうだ。と思い出す。

「まあ、俺には考えるほどの選択肢がないんだ…ところで行くにしてもいつ行くんだ？」

「ん、今から」

「なるほどな、早くないか？」

「もうお昼過ぎよ？」

そう言われると、起きるのが遅かったと頷く。

妖夢を起こそうとしたが、幽々子がロックオンの手を掴んで静止する。

「ダメよ、今日はゆっくりしてもらってから…行きましょ？」

「俺にゆっくりの時間は無いのか？」

「あのお水、二日酔いに良いでしょ？」

そう言って満面の笑みを見せる。

言うとおりに、すうっと頭痛は抜けていた。

まいった、とポーズをとって、彼は幽々子について行くことにした。

白玉楼の正門から出て、長い長い階段を下りた。

「たく、長いなあ」

一緒に降りている幽々子が止まる。

振り返ってその顔を見ると、何かをひらめいたような顔をしていた。

「私が運べば良いんだわ」

「は？」

その瞬間、ふわっと風が吹いき、ソレと共に幽々子の体が浮いた。ロックオンは一瞬言葉が出せなかった。

出そうと思って口を開いた瞬間、両脇を掴まれ持ち上げられた。

「うおお！」

そのまま飛ぶ。

空中を女性一人に掴まれて飛ぶ。
結構な恐怖だった。

ガンダムに乗る方がよっぽど恐怖だとも思えるが、違う怖さがある。

「半霊はしっかりついてきてっか？」

空を飛びながら呟くと、横に半霊がつく。

それに安心しながら、幽々子の方を向いた。

顔が異常に近いが、気にすることでは無いと理解する。

「さて、人里までどんなもんだ？」

「すぐつくわ、飛んで行くのだし」

そっぴわれて考える。

「飛ぶのって誰でもできるか？」

「人間だつたら才能にもよるわね…その他の種族はだいたいできるけど…半人半霊は努力しだいってことを言っておくわ」

そついわれて、考える。

楽ならば、一時の努力でなんとかしよう。

風を受けて考える。飛ぶのは楽しそうだ。

降りた場所は、人間の里から少し離れた森の中だった。そこで、ロックオンは背を伸ばす。ずっと上に引つ張られている状態は中々厳しいだろう。

「大丈夫かしら？」

「ああ、半人半霊になってからは体もずいぶん楽だしな」
そう言つて歩き出す。

そして、少し歩いてから気付くいた。

昨日はほとんど歩かなかった。

今朝の階段だつて一本道でほとんど気にしなかった。

だが、今になって気付いた。

まだ、右目が失ったことになっていない。
右側に意識を集中しすぎる。

また左側に意識を集中しすぎたりもする。

ロックオンは安定しない速度で歩く。

その姿を見て、幽々子は純粹に疑問を投げかける。

「目は見えなくなっただけから日は浅いの？」

そういわれて、笑うしかなかった。

簡単に見破られる。

かっこ悪い。

2000回のスペシャル様の攻撃から味方を守って故の名誉の傷。
そういえばたかなんと楽だろう。

だが、そのせいで自分は一度死んだんだ。
きっと彼は自分をせめている。

「かっこわるい」

「あら、眼帯なんてかっこいいじゃない」

その言葉に、少し驚いた。

幽々子の顔は嘘をついている顔じゃない、一切が本当と言う顔をしている。

「それで完璧に歩けるようになりましょう…ね？」

「…そうだな」

そう言って笑う。

先ほどと違って今回は清々しい笑い方だ。

「私が手でも握ってあげましょうか？」

そう言つて、幽々子は腕に腕を絡めた。

フツと息を吐いて、後頭部をかく。

「お願いしますよ、お嬢さん？」

冗談でそう言つと、幽々子は嬉しそうに腕を引いてくれた。
とりあえず、当分右は安泰だ。

人里についても直、幽々子はロックオンの腕に腕を絡めていた。
流石にどうかと思い。一言。

「知り合いに見られて勘違いされても知らないぞ？」

「大丈夫よ、不男ならまだしも、あなたですもの」

「嬉しい事言ってくれるねえ」

そう言いながら、彼は口笛を吹いた。

二人は歩きながら人里を見てまわる。
ロックオンが夢見た日本の風景に似ていた。
ただ、武士は居ない。

「おや、幽々子殿」

その声は右側から聞こえた。

左目で見えるまで顔を右に曲げる。

すると、そこには一人の女性が立っていた。

「あら、慧音じゃない」

さっそく知り合いのようだ。

慧音と呼ばれた女性は近づいてきて笑う。

「お邪魔だったか？」

「いいえ、別になんでもないから平気よ」

そう言つて、幽々子は笑う。

慧音がロックオンを見た。

少し、幽々子との関係を疑っているようだった。

「ああ、本当になんでもないんだ…ほら、見てのとおり右目が見えないから」

「なるほど…私は上白沢慧音です、慧音と呼んでください」

「俺はロックオン・ストラトス、ロックオンで良い」

慧音が手を差し出す。

空いてる手でロックオンは握手をした。

「ところで、貴方はいつから？」

「まあまあ、積もる話でもあるでしょうし……まずはご飯にしましょ
う。」

幽々子は嬉しそうに言う。

それに呆れるように溜息をはくロックオンと慧音だった。

慧音とロックオンと幽々子の三人が、飲食店に入る。

案外しつかりしてるんだな、とロックオンに思わせる洋風の店だ。
そこで食事をしながら、会話をしていた。

「外来人で半人半霊……そんな例は今までないと思う」

そついう慧音に、同意する幽々子。

逆にそうだったのか、と驚くロックオン。

珍しいとは昨日の妖夢の反応で理解していたが、初めてだとは思わ
なかった。

「とりあえず、何にしろ職と住処を見つけなきゃなんねえんだ」

その言葉に、幽々子は不満そうだ。

「あら、ずっと家に居れば良いのに」

「そついうわけにもいかねえよ、甘えちまったらお終いだ」

頷くロックオンと、つまらなさそつにする幽々子。

逆に慧音は彼の誠実さに、驚いていた。
見かけは結構チャラチャラしていても、案外芯の通った男だと見方を変える。

「ロックオン殿は、生前なにをしてたんだ？」

ガンダムマイスター。などと答えるわけには行かない。
なんと答えるべきか悩んで、一つの答えを出した。

「旅人」

それに、意外、と反応する慧音と幽々子。
それもそうだろう。
そんな柄には見えない。

「して、何を目的に？」

だが、慧音は聞いた。
目的を、したかったことを、優しい微笑をしながら、茶を飲んで。
こんな雰囲気だから、話してしまう。

「いやだったのさ、この世の歪みが」

「歪みとは？」

「しょうがねえ世の中、聖戦だとか言って関係ない人間を巻き込んで全て破壊して、自分が生きるために全て破壊して…その連鎖を、破壊したかったのさ…俺たちは」

俺『たち』と言った。

「なるほど、答えは出たのか？世界はどう返した？」

「結果はダメだ…俺は失敗した」

そしてお茶を飲み干すロツクオン。

向かいに座る慧音の瞳を真っ直ぐと、見つめる。

「教師をやってみないか？」

驚いた。言葉も出なかった。

旅人と答えたのになぜそうだったのだろう。

もう一つ候補で出た美容師って言うてもこうだったのではなからうか？

「なんでそうだったんだ、俺がモノを教える立場に見えるか？」

「いや、その歪んだことが許せないということが気に入った…教師をやれ！」

命令形だった。幽々子は楽しそうに笑っている。
なる以外道はなさそうだ。

特に、早く出て行って探さなくてはいけない。

自分がここにいる意味を――

mission2『人里』（後書き）

あとがき

はい〜こんな感じです。
どうですかあ〜！

ロックオンっぽかったですか？
まあ、ダメって言われたら落ち込むだけですが…

これからも更新頑張っていきますので！よろしく願いします！！

mission3『寺子屋』

とりあえず、店を出る。

右側を幽々子に見てもらいながら、寺子屋に行く事にした。その店からそうはなれて居ないところに、ソレらしき場所。

止まると、慧音が振り返る。

どうやらここのようにだった。

中々大きな建物だ。

「一部は私の家にもなっている」

学校兼自宅ならば相当広いだろう。

特に、ここに来るまでの里の人間の反応からして、彼女はかなり名の知れた人物。

こんな家に住んでいても不思議じゃない。

慧音の後について門を開き入る。

玄関から中に入った。

「どうぞ」

その言葉で、幽々子とロックオンは靴を脱いで中に足を踏み入れる。慧音についていくと、一つの部屋の前で止まる。

「どうした？」

「いや、開いている？」

疑問に思ったのか、彼女はドアを開いた。
そこには一人の少女。

少女は驚いた様子で慧音を見ていた。

ワナワナと拳を振るわせる慧音。

「妹紅!!」

わわわっ、と声を上げて、少女は椅子から転げ落ちた。
顔を上げると、慧音を見て苦笑。

そして立ち上がると、少女は幽々子を見て驚く。

「ひゃあゝ、亡霊の姫君にまさか半人半霊の彼氏とはね」

「っの…バカ!!」

慧音の叫びと共に、少女に頭突きが放たれる。

直撃した少女は痛そうに転げまわっていた。

これが、ロックオンと少女、藤原妹紅とのファーストコンタクトだ。

先ほどの部屋に置かれたソファに、4人は座っていた。

二人掛けのソファに二人づつ。

ロックオンと幽々子の向かいに、机一つ挟んで妹紅と慧音が座っている。

「で、ここが職員室だ…教師は私だけだが、たまに臨時でこの藤原妹紅がやってくれる」

妹紅は先ほど打った頭を押さえながら軽く一礼。

「藤原妹紅よ」

そう言つて、彼女はポケットからタバコを取り出す。

慧音がその手を掴んだ。気のせいか、その手からギリギリと音がする。

「何度も言わせるな…職員室は禁煙だ」

素晴らしい笑顔だった。

妹紅がたじたじだ。

大人しくしようと、不貞腐れたような顔になる。

「ああとここで、貴方は得意な勉強などはあるか？そこをクリアしてもらわないと教師にするにも…あれだしな？」

その言葉で、少し頭を悩ませた。

得意な勉強。

『宇宙論』

なんて答えるには微妙だ。特にこの文明ではなんともいえない。ならば何を教える？

「…数学とかならでкинじゃねえか？」

そう答えると、慧音は嬉しそうに両手を叩く。

「おお！私もそれは苦手だな…数学教諭として活動していただけたら助かるのだが」

頷くロックオン。

さらに嬉しそうにする慧音を、妹紅がバカにするように笑った

「それは苦手じゃなくて、歴史以外できないんだろ…ヴっ」

妹紅の腹部に、慧音の肘が直撃する。

苦笑するロックオンと、楽しそうに笑う幽々子。

何事もなかったかの用に笑う慧音は、ロックオンに一礼する。

「本当にありがとう、仕事を始めるのは今度にしても」

そう言って立ち上がる。

「たしか家に困ってるんだっただか？」

そう言われて頷く。

だが、そこで止まる。

まさか、家を用意？そこまでしてもらう間柄じゃない。

そう考えて遠慮しようとした時、慧音はそれを感じてか笑う。

「なに、サービスだ…保険はきかないからな」

そう言っただけ。

それに返すようにロックオンも笑った。

しかし、幽々子がすこしばかり釈然としない様子だった。

寺子屋兼慧音の家を出て、少しばかり歩くと、一件の小さな家があった。

二階建てで、和風だ。
そんな家。

「ここなのか？」

「ああ…もらってくれて良い、近くに悪霊が出るらしくて誰も住まない」

「そこを俺に渡すか」

「お前は半霊だから大丈夫だと思ったんだが」

そう言われると、確かにそうだと頷く。
幽々子はまだ少し不機嫌そうだった。
ロックオンは聞いてみる。

「どうした？」

「ん、あつ…ええ…なんでも無いわよ」

そう言って笑いかける幽々子。
釈然としない気持ちでその言葉に頷く。

「さて、問題は中なんだがな」

そう言って、鍵を持つ。
なぜ持っているのか知らないが、ここを管理しているからだろうか？
扉を開いて、中に入る。

ここが誰にも使われていないというのを理解した。

ほこりまみれだった。

家の中に荷物が散乱していないのが唯一の救いだろっ。

「さて、掃除だな……」

そっという慧音。頷くロックオン。

だが、日も沈んで着ている。

諦めるロックオンは、幽々子を見た。

「今日も、泊まらせてもらって良いか？」

そんなロックオンの言葉に嬉しそうに頷く幽々子。

その表情を見て笑う慧音。

「ふうん…なるほどねえ」

そして、何かを考えている妹紅。

ロックオンはありがとと礼を言って、帽子の上から幽々子の頭を撫でた。

とりあえず、明日には絶対に出て行って一人暮らしで迷惑をかけないと思う。

慧音と妹紅と別れて、幽々子に抱えられ飛んでいるロックオン。
そして、少し思う。

「なんか悪いな、幽々子」

「どうしてかしら？」

「今日も泊まりで」

突如、笑い出す幽々子。

それを不思議に思うロックオン。

「私は嬉しいわよ…ロックオン、貴方面白いもの」

そういわれて笑った。

せつかくの美女からの言葉が面白いだったとは、おやっさんにもラッセにも笑われかねない。

そう思いながら、幽々子に言った。

「面白いか…お前みたいなお美女に言われるんだったら歓迎だ」

そう言っていると、幽々子が急に黙ってしまう。

幽々子のバランスゆえ頭を下手に動かせないロックオンは、前に頭をむけたまま聞く。

「どうした？」

「っ…な、なんでもないわ」

そういわれて、そうなのだろうと確信する。
そしてロックオンは笑った。

「さて、今日はゆっくり寝るか」

「フッフそうね」

二人は、白玉楼に向かって飛んでいく。

ロックオンは明日のことを考えて、にやける口が押さえられずに居た。

新しい。平和な世界で第一歩。

それはきつと、明日から始まる。

mission3『寺子屋』（後書き）

あとがき

はい！こんな感じです。
これがガンダムだ！

まだ先になりますが、ロックオンも弾幕をしますよ？
もちろん能力だってあります。
まあそれもこれも続きをお楽しみに！！

mission 4 『武力』

白玉楼に泊まった朝。

ロックオンは体の揺れで目を覚ました。

「ロックオンさん、おきてください!」

フカフカの布団で眠っていたせいか、ずいぶんぐっすりだったらしい。

相手を視認して頷くと、起き上がる。

「おはようございます」

「ああ、おはよう…妖夢」

そう言っただけで起き上がると、開かれた襖の外を見る。

綺麗な朝日が上っていた。

宇宙にいるころは経験できなかった。

地上にいた頃の気持ちの良い朝を思い出す。

「私は幽々子さまを起こしてきますので!」

強い口調でそう言うと、部屋を出て行った。しっかり襖も閉めてだ。しっかりしていると言いつつ、立ち上がる。着物の帯を解いて脱ぐと、両頬を叩く。

「今日は掃除だっ…気合入れるぜ!」

服を手を取った。

ロックオンが、いつもの服に着替えて居間に行く。
妖夢がすでに座っていて、朝食も用意されていた。
幽々子が居ない、と辺りを見回すが居ない。

「座って待っていきましょう」

そう言われて、大人しく座ると、襖が開いて幽々子が現れた。
ロックオンは普通に幽々子を見て、笑ってしまった。

「ようむー、ごはん」

「どうぞ」

眠そうに眼をこする幽々子。

ダルそうにしているが、ロックオンを視界に納めた。

「おいおい、着物がだいぶ崩れてるけど、良いのか？」

驚いたような表情をする幽々子。

次の瞬間、顔を真っ赤にして着物を整える。
妖夢が驚いた顔をする。

「さて、食べましょう!」

そういわれて、不思議そうな顔をするロックオン。
三人は手を合わせて言う。

「いただきます!」

その声と共に、朝は始まった。

彼が幻想郷で本当に生活を始める一日目と言っても過言では無い。

そして時は進み。

引越す家へとやってきた。

中に入ると、そこは随分埃だらけで薄汚れている。

先に合流した慧音も驚いているようだ。

家具はタンスやらなにやら、大きなものは揃っていた。
中を確認しても何一つ無かった。

「うーん、使えそうな小物は無いわね」

幽々子がそう言うと、唸るロックオン。

「香霖堂に行こう!」

突如響いた慧音の言葉。

ロックオンは頭に謎を浮かべる。

「なんだ、その香霖堂って?」

その言葉に、少し考えるような仕草をする慧音。

答えると思いきや、慧音はロックオンの腕を掴む。

「行けばわかるさ!」

そう言って手を引こうとする慧音。

ロックオンは、足で踏ん張りながら妖夢と幽々子を見る。

「ここは私にお任せください!」

そう言っただけで笑う妖夢。

ロックオンは、悪い、と片手で謝ると慧音に連れて行かれる。
其の場に残される妖夢と幽々子。

「さて!やりますよ幽々子さま!」

「ええゝ嫌ゝ」

妖夢は箒片手に気合を入れる。

だが、正反対に面倒くさそうな幽々子。

「ロックオンさんのためです！」

そう言うと、少し表情を変える幽々子。

「うゝわかったわよ…やるわよ妖夢！」

「はい！」

二人は掃除を始めた。

気合の入った妖夢と幽々子が掃除する姿は、思いの他シユールだった。

ロックオンは慧音に運ばれて森へと降りる。

飛べないロックオンを運ぶのに、慧音は苦もなかったようだった。さすが、子供達の相手をしているだけあるのだろうか？

「さて、ここだ！」

目の前に一つの店。

『香霖堂』

そう書かれた看板が置いてある店が一件。

「入るぞ！」

「はあ、了解」

そう言つて、慧音の後を追つて店に入る。
中は骨董品店という感じた。
いろいろ置いてあつて目移りする。

「霖之助殿！」

慧音が叫ぶと、カウンターの奥の方から、一人の男がやってきた。
銀髪にめがねというインテリ系だ。
やる気のなさそうな顔でやってきた。

「なんだい慧音…君か、今日は客としてだろうね？」

「もちろんだ」

そう言つて、慧音はロックオンを指差す。
驚いた様子のロックオン。

「なんだい、半人半霊は白玉楼じゃないのか？」

「少し例外だ、聞いてくれ」

そう言つて、慧音は話しを始めた。
ロックオンはその間店を見ようと、辺りを見回しながら歩く。
やはり、右目が見えないのが厄介だと、再認識させられた。

少しすると、慧音の呼ぶ声が聞こえた。

戻ると、霖之助が笑顔で立っている。

それを少し不気味に思いながらも、笑顔で返す。

「結構いろいろあるみたいだね、ボクは森近霖之助…ここ、香霖堂の店主だ」

そう言って手を差し出してきた。

ロックオンはそれを見て、人は良さそうだと判断して手を握る。

「俺はロックオン・ストラトス…半人半霊だ」

「ああ…とりあえず、食器は慧音が買った」

そう言っくと、驚いて慧音を見る。

ウインク一つで返す慧音に、感謝して笑う。

霖之助は手を離すと、眼鏡を上げる。

「それで、いくつか商品を譲ろう」

それに、さらに驚いた。

商売なのに、そんなので良いのだろうか？

疑問を口にしようとした時、霖之助が言葉を続ける。

「ただし、モノを買うときにできるだけここを使用して欲しい…で
きる限りで構わない」

「そんなのが条件か、じゃあ…ぜひその条件を飲ましてもらっぜ」

そう言っくと、霖之助が店の奥へと引っ込む。

それを疑問に思いながら待っていると、霖之助が奥から何かを引っ

張りだしてきた。
大量のモノだ。

拳銃。携帯電話。PC。

ブルーレイディスク。

そんな物の山の中に、見つけた。

「っ!？」

その山の中から幾つかを取り出した。

驚いている霖之助。それは見ている慧音もだ。
ロックオンがそこにおいたモノを見ている。

「それはボクでも扱い方がわからなくてね」

苦笑する霖之助。

まさかと思って手に取る。

形は一寸たりともかわらない。

今まで見てきたものだった。

「これはっ……GNビームライフル」

それは愛機デユナメスの武装の一つ。

最期まで世話になった武装の一つだった。

「なんで、これが？」

霖之助は驚いているようだった。

「知っているのかい？」

その言葉に、ロックオンは考える。
幻想郷でこれを知っていると云っても、特に問題は無いと頷いた。

「ああ、俺の大切な武器だ」

そう返すと、霖之助が頷く。

彼の笑顔は何かを考えているようだ。

「じゃあ、同じ場所にあったこれもプレゼントするよ」

そして、二本の四角い棒がわたされた。

「GNビームサーベル!？」

その二本も手に取る。

その言葉に、霖之助は困っている。

「能力でわからなかったんだが、君にはわかるかい？使いかたが…」

少しあたりに気をつけながら、ビームサーベルのボタンを見る。
しっかりと握って、そこを、押した。

その瞬間、ピンク色の光がビームサーベルの柄から伸びた。
それはいつも見てきたそれとまったく同じだった。
驚きながら、ボタンから指を外すとビームが戻る。

慧音と霖之助も驚いている。

「…これはもらっていつでも良いか？」

「あ…ああ、構わないよ…君じゃないとビームが出ないようだ、ボクではボタンを押してもなんとも無かった」

その言葉を聞いて、さらに驚く。

このサーベルは自分を選んだのか？

ガンダムマイスターだからか、それとも自分だからか？

わからないが、これを自分がもつのは運命的なことを感じる。

「じゃあ言葉に甘えて貰っていく」

「ああ、これもあげるよ」

そう言つて、ベルトを渡される。

これも一緒に落ちていたのかもしれないと、それを腰につける。

腰の横についてあるホルダーにビームピストル二挺を差込み、腰の後ろにビームサーベルを二本さす。

確実に、このためにあるというものだ。

「さて、それだけさ…もうあげるものは無いよ？」

「わかってるさ、ありがとうな」

そう言つてロックオンは動き安いかを確認するように上半身を左右に動かす。

慧音は頷いて外に出た。

ロックオンも外に出ようとする。

「ロックオン…」

呼び声で、真後ろを見る。
二人の視線が交差した。

「またのご利用をお待ちしてるよ」

「ああ、またな」

そう言ってロックオンは外に出た。

ロックオンの家で、妖夢と幽々子が息をついて寝転がる。
おそらく居間的な部分だろう。
家の中は綺麗になっていた。

妖夢一人ではそうはならなかっただろう。
幽々子も今回は本気だった。
内心驚いている妖夢。

「ロックオン、喜ぶかしら？」

そう言って横になる幽々子の顔を見て、理解した妖夢。

なぜ、ここまで気にしているかだ。

わずか数日の内に、彼はどうやって幽々子の心を掴んだのだろう。まだ、恐らく幽々子にとっては恋では無いだろう。

良い友人だ。

でも、きっとわずかな出来事で恋心に変わりかねない。それを感じながらも、自分はどうするべきか悩んだ。応援するか、反対するか。

「ただいま、妖夢、幽々子！」

玄関からロックオンの声が聞こえた。

起き上がろうとする妖夢より早く、幽々子は立って玄関まで行く。驚く妖夢。案外、一目惚れなのかもしれない。

玄関のロックオンの右腕に腕を絡める幽々子。

驚いたような表情をするロックオンと正反対に満面の笑みの幽々子。

「ああ、上がる時は頼むけど、少し食器とかを家に入れようと思っ
てな、家の中は掃除終わったか？」

そう聞くと、幽々子は嬉しそうに頷いた。

「私が頑張ったんだから」

そういう幽々子の頭を、ロックオンは優しく撫でる。
気持ち良さそうな顔をしてそれを受け入れる幽々子。
それを見ていた妖夢は、顎が外れんばかりん口を開いていた。

さて、またまた飛んで夜。

既に日が落ちている中、ロックオンの家には電気が通っていた。
どこからかはわからない。

だが点いているのだからしょうがない。
最近の和風の家と言った感じだった。

晩御飯は、慧音と妖夢が作っている。
ロックオンと幽々子は居間にいた。
彼のベルトと武装は背後に置いてある。

彼は当初食事を手伝う予定だった。
しかし、手伝えない理由ができてしまった。
彼の膝の上には、幽々子の頭がある。
しかもそのまま寝てしまっているのだ。

「たくっ…亡霊の姫さんもかわいいもんだな」

優しく頭を撫でる。

幽々子が、ふと目を覚ました。
ロックオンを確認すると、その頬を手で撫でる。

「……ん、ろつくおん」

呟いて、微笑む。

同じくロツクオンも微笑み返した。

その瞬間、幽々子の顔が真っ赤に染まる。

「幽々子様、夜ご飯ですよ」

「う、うん妖夢！わあ、お腹すいたあ」

赤い顔のまま、幽々子は料理を見る。

どうした？と思いつながら、その姿を見るロツクオン。

そして、呆れたようにロツクオンを見ている妖夢。

「さて、食べましょう！」

慧音も料理を運んで両手を合わせる。

全員が手を合わせて声をそろえた。

「いただきます！」

食事が始まった。

ここでは特にイベントは無かったと記しておこう。
だから飛んで、全員が帰宅する時だ。

ロックオンの家の前。

慧音がロックオンと幽々子と妖夢に一礼する。

「今日はありがとう、楽しかったよ」

「いや、こつちこそいろいろありがとな…明日からよろしく」

「ああ、こちらこそ…では、これで」

そう言ってもう一度一礼すると、彼女は踵を返して帰っていった。

その背中を見送ると、次は幽々子と妖夢だ。

二人は寂しそうな顔をしていた。二日といえど優しい二人は寂しがつているのだろう。

「ありがとな、まあたまには遊びに来てくれよ」

頷く妖夢、一礼して空へと飛んでいく。

残る幽々子は、笑顔を見せる。

「今度遊びに着てね？」

「任せろ…絶対に行くから…飛べるようになったらな」

幽々子は上品に笑った。

しっかりと冗談がわかってくれたようだと安心する。

寂しそうな顔を見せて、手を振る。

「またね」

「ああ、またな…いつでも来いよ？」

「うん！」

幽々子も空へと飛んでいった。

二人の姿が見えなくなってから、ロックオンは家へと入る。鍵を閉めて、家へと入る。廊下を歩いて寝室へと入った。襖を開けて、慧音にもらった綺麗な布団を出すと、敷く。

ベルトを外して、服を脱いで着物に着替える。

電気を消してから、ロックオンは眼帯とベルトを枕元に置いた。

「明日が本番だ、しっかりやれよ…ロックオン」

自分にそう言い聞かせて瞳を閉じる。

明日が本番。

ここでの生活だって、これから始まる。

謎は増えていくが、これからドンドン解明していけば良い。自分は今度こそ、自分がいる意味を知りたい。

mission 4 『武力』（後書き）

あとがき

今回グダグダでしたけど、次回はもっとちゃんとしてると思います
よ！？

missions『先生』

ロックオンはふと、目を覚ました。
勢い良く起き上がって、荒く息継ぎをしている。

「はぁ…はぁっ…」

落ち着くと、汗を拭って外を見る。
快晴のようだった。

先ほど見た悪夢を思い出す。

「なんだ、あの奇妙な仮面をつけた赤いの…見てのとおり軍人って…軍人に見えるかよ」

頭を抱える。

なぜかあの男を思い出すと黒いフラッグを思い出す。
しかも抱きついてきたあいつだ。

「ああゝ嫌だ嫌だ」

そう呟いて、ロックオンは洗面所に向かう。

どういう原理か、電気、水道完備の素晴らしい家。
どこかに繋がっているのだろうか？

まあ、便利だ。ということでロックオンは気にせず使っている。

「ぶはぁっ！」

顔を洗って目を覚ます。
髪のを掻き上げる。

その時、外から声が聞こえた。

『ロックオンいるか〜!』

その声を聞いて、玄関の方へと向かう。

鍵を開けて戸を開くと、そこには慧音が立っていた。

おそらく今日のことで話があるのだろうと理解して、招きいれた。

「居間で待っていてくれるか？」

「承知した」

そう言うて居間に入れると、ロックオンは寝室へと向かう。
いつもの私服に着替えをする。

できれば代えの服なども買っておこうと思い、頷く。

腰に武器の装備されたベルトを巻くと、居間へと向かった。

ロックオンの家へとやってきた慧音は、内心穏やかではなかった。
そもそも男の家に一人で来るというのは始めてだ。（香霖堂は例外）

ロックオンは不思議な人間だった。

今まで、外来人たちの話を沢山聞いてきた慧音。

だが、帰る者も帰らない者も皆、今の世の中で構わない。というも

のばかりだった。

疑問を慧音がぶつけても「しょうがない」「自分じゃどうにもできない」などの弱音ばかり。何かをした者もない。

だが、彼は違った。

詳しいことは知らないが、その歪みとやらと戦っていた。旅人と言っていたが嘘だろう。

それで歪みと戦うことはできないと思う。

まだまだ知らないことが沢山あるが、これから知っていく。彼とはきつと仲良くやれる。

そう思い。慧音が頷いた。

その瞬間、襖が開いてロックオンが入って来た。

「どうした、嬉しそうな顔してるな？」

「いや、こちらの話しさ」

そう言ってもう一度頷く。

ロックオンが机を挟んで向かいに座る。

それで準備ができたと察して、慧音が話しを始めた。

「私の寺子屋の生徒は少ないし、全員一緒に勉強をしている……まあ、雰囲気は良いと思う、全員仲が良いしな」

嬉しそうに話す慧音。

『親バカ』親じゃないだろうが、そういう単語が頭に浮かんた。

「基本的にはわからない子にはわからせるがモットーだ」

「そりゃ随分熱血だな」

そう言つて、笑う。

慧音も良く言われると言つて笑う。

言つのはどうせ妹紅あたりと推測した。

「ああ、だがお前にもついて着てもらう!」

手を差し出す慧音。

「了解：やらせてもらうぜ」

そう言つて彼は慧音の手を取る。

握手をかわす。こうして、ロックオンの教師としての生活が始まる。

「朝ご飯を作るのは任せておけ、台所を借りるぞ」

「おう、ありがとな」

慧音はその言葉を背に聞いて、歩いていった。

頷きながら、ロックオンは腰についている武器をどうするか考える。

寺子屋。

教室内に慧音が入る。

教室の外から、ロックオンは中を少しのぞく。

『先生！・・・君が！』

『違うよ！』

『静かにしろ！』

教室で子供達が騒いでいる。

慧音の大声が聞こえた。

随分元気が良い子供たちだ。と頷きながら苦笑する。

「うはは...こりゃ流石の慧音でも手を焼くかあ、んなら、教えるでしょうか」

そう言つと手を眼帯に当てる。

フツと笑つて頷いた。

「行こうぜ、ロックオン・ストラトスの初陣だ」

静かになった教室の中から声が聞こえた。

『新しい先生だ、ロックオン！』

その声に、教室の戸を開けて中に入る。

中は木製で、独特の雰囲気があるが悪いわけじゃない。

ロックオンが慧音の横に立って、笑顔で言う。

子供たちは全員、ロックオンを見ていた。

「今日から、ここで教師をやることになったロックオン・ストラトスだ、よろしく」

そう言つて、少し経つ。

子供たちから、笑顔が返つて来た。

ソレと共によろしくお願いしますと、大声。

嬉しくなつて、笑顔を浮かべた。

横に居る慧音はその表情を見て、頷く。

「皆、ロックオン先生は当分は私の補佐をやるだろうから、仲良くするように！」

子供達の返事が返つて来た。

ロックオンは先生として、この幻想郷に立つ。

ちなみに、武器は結局装備している。

白玉楼。

もうお昼ごろだというのに、幽々子は縁側でお茶を飲んでいた。

妖夢が、傍に寄る。

それでも気付かない幽々子。

心配になって、肩を揺さぶった。

「えっ？」

驚いた様子で妖夢の顔を見る。

「あつ、どうしたの？」

「どうしたの？じゃありませんよ幽々子さま、さっきから声をかけているのに返事の一つも無しで」

「あら、ごめんなさい」

そう言って笑うと、立ち上がって屋敷へと入っていく。

その姿を見て驚きながらも、妖夢は深い溜息を吐いた。

恋煩いと言っ奴だろうか？

厄介なものだ。

彼女は今頃子供達と楽しくやっているであろう彼の顔を思い出した。

上白沢慧音は驚いていた。

理由は、彼ロックオン・ストラトスのことである。
一瞬で彼らの心を掴んだ。

「うわあゝ！ソレ何！？」

生徒の少年はロックオンの後ろに浮いているそれを指差す。

「これは半霊って言うんだ…お化けって奴だな」

「お、お化け？」

少女が泣きそうになる。

だが、ロックオンは頭を撫でて少女の涙を引っ込めた。

「良い子にしてりゃ大丈夫だよ」

そう言って笑いかけると、少女は嬉しそうに頷いた。

男の子たちがいろいろと煽るが、ロックオンは気にせずいろいろな子供たちの話を聞いている。

「（あれが、アイツの性格ゆえか…元の世界でもさぞかし良いリーダー格だったんだろう）」

楽しそうに話しているロックオンを見て、微笑んでいると、生徒の一人が窓の方を指差した。

「あゝ妹紅お姉ちゃんまたタバコ吸ってる!」

その声に、慧音がそちらを見る。

窓から身を乗り出して教室を見ている妹紅。

楽しそうにロックオンを見ている妹紅。

だが、慧音が妹紅の頭をギリギリと掴む。

「何度言わせる…ここは、禁煙だぞ?」

タバコをくわえながら、妹紅が慧音の手を掴む。
ギリギリ音が鳴る。

「わ、わかってる…いたたたたっ!わかったから!」

「何度目だ?」

「悪かったよお!痛い!」

そう言っている妹紅を、まったく離さない慧音。
そこに、慧音の手を掴んで止める人物が居た。

「なぜ止める」

「ロックオンゝありがとなあ」

ロックオンが慧音の手を掴んでいた。

その代わりに、ロックオンは良い笑顔で妹紅を見ている。

「今回は好きにさせるけどな？」

いまだに痛む頭を押さえながら、妹紅は苦笑する。

慧音はむうつと不満そうに頷いた。

「してロックオン先生、いつまで慧音の腕掴んでるつもりなんだ？」

妹紅の言葉で、ロックオンは気付く。

「ん、ああ、悪い悪い」

そう言つて離すロックオン。

だが、慧音の方は真っ赤な顔をしていた。

妹紅は真っ赤な顔で大爆笑している。

「アハハハッ！慧音：初心はつこすぎ！」

「も…もこう！！」

やばい、と言つて走つていく妹紅。

真っ赤な顔で怒つてそれを追う慧音。

その後姿を見ながら、生徒たちは溜息を吐いている。

「また始まった」

「よくやってるんだよね、妹紅お姉ちゃんが慧音先生を怒らせるんだよね」

そう言っている生徒たちに、ロックオンが溜息を吐いた。

これを頻繁にしているのかと、見ている。

だが、なんとなくだが二人とも楽しそうだったので放っておく事にする。

「さて、授業再開……やってみるか、俺一人で」

なぜか、さっそく実戦投入されるロックオンだった。

余談だが、案外好評だったとかなんとか。

子供たちが全員帰った後。

職員室に慧音とロックオンが居た。

二人が机を挟んでソファに座っている。

「で、今日一日どうだった？」

「ああ楽しかったぞ…人にものを教えるってのも悪くない」

そう言って笑う。

慧音はそれを聞いて安らかに微笑んだ。

「明日も、手伝ってくれるか？」

「ああ、やらせてもらうぜ」

そう言つと、嬉しそうに微笑む慧音。

その顔を見ると、大人な慧音がなんだか少女のような感じがした。

少し、慧音が真面目な顔をする。

それにあわせて表情を変えるロックオン。

「一つ、頼みたいことがある」

「ん？」

「妖怪や妖精を見つけたりしたら、その者たちに『勉強に興味は無いか？』と聞いてくれないか？」

その言葉に、少し驚く。

人間は妖怪や妖精をなるべく避けると聞いた。

力が強いから、被害をこうむる可能性があるからと――

「私は、勉強に励もうとするものに悪いものがあると信じたくない……そして私の教えたことを後世まで語り継いでもらいたい……そのために、妖怪や妖精たちにも教えを」

「良いのか、ほかの連中はそうは言わないかもしれないぜ？」

試すような目で見るロックオン。

その目に射抜かれながらも、慧音は自分の思いを口にする。

「……違う、そんなの関係無いんだ、子供たちは受け入れてくれる……子供達が受け入れれば大人たちだって受け入れる、そこから皆が一つになれば良い」

胸に手を当ててそういう慧音。

表情は穏やかで、まるで未来を見据えているようだった。それにロックオンは頷く。

「了解」

その言葉に、驚いた表情の慧音。

「良いのか……お前は怖くないか？」

「俺はこれでも半人半霊……人間じゃないんだよ」

そう言うのと、慧音が可笑しそうに笑う。

すっかり忘れていた。

普通の人間として接していた。

そんな自分が可笑しくて笑う。

「それにそんな世界……俺は、好きだね」

そう言うのと立ち上がるロックオン。

慧音も立ち上がって、頭を下げた。

「ありがとう、恩に着る」

「んなもん着るな……十分だよ、私生活をもらっただけでさ」

そう言つて慧音に頭を上げさせると、職員室の戸を開く。
慧音が微笑んでいる。

その笑顔に、笑顔で返した後、ロックオンは片手を上げて教室を去った。

上白沢家兼寺子屋を出ると、玄関付近に妹紅が居た。
気恥ずかしそうにロックオンを見るとニヒルに笑う。

「今日はありがと…危うく頭が潰れて一回死ぬところだった」

「命は一つだろ」

そう言つてはみたが、自分は二回目だ。と思い出して吹き出した。
妹紅は不思議そうな顔をしている。

「クククツ…いや、悪い悪い」

そう言つて妹紅の肩をポスッと叩く。
友達にやるようなそれで、やられた妹紅は悪い気はしなかった。

「たくっ…お前とは上手くやってけそうだよ」

「俺もだ」

そう言つて歩き出す二人。

夕暮れの町でも、案外店はやっている。

ふと、ロックオンが聞く。

「ところで、タバコはどこで売ってた？」

「ん〜、里でもいくつかあるけど、香霖堂と永遠亭が一番数が多いんじゃないかな？」

そう言っつてタバコを出すと、口に銜えた。

立ち止まるロックオン、妹紅が悪い、と一言。
人差し指をタバコの先端に添える。

ポツと、指先から炎が出た。

それはタバコに火をつけるを消える。

「さて… んで驚いてる？」

「まあ、多少はな… 半人半霊の俺が言っつてもしょうがねえけどな」

「違うないな、あたしは炎を出せる…（能力のことはまだいいか）」

そついう妹紅に頷いて、歩みを進める。

「俺も買つてくるかな… 金が入ったら」

そつ言っつて笑うロックオンに、妹紅が胸ポケットから出したタバコの箱を向ける。

驚きながら妹紅を見るロックオン。

笑う妹紅。

「やるよ、今回はサービスだ」

そう言つて投げると、ロックオンは片手で受け取った。
苦笑しながら、それをポケットに入れる。

「恩に着る」

「そんなもの着るな」

そういわれて少し吹き出してしまった。

良く笑う奴だな、と言われながらもロックオンは妹紅の背中をバシバシと叩く。

「叩くなバカ！」

「良いじゃねえか…お前とはなんだか初めての気がしねえ」

そう言われると、気恥ずかしそうに視線をそらす。

「あたしも、そう思う」

幻想郷での数少ない友達の一人に、妹紅が参入した。
これが後々の火種になることは言うまでも無い。

missions『先生』（後書き）

あとがき

はい！今回は少しだけ、ロックオン先生アニキの日常生活が安定してきました。

そして妹紅は友人飛ばして親友みたいな気がwww

ちなみに、一人だけオリジナルキャラクターを出すかもしれません。そこらへんが嫌な人は感想で言ってくればやめますので…

では、また次回をお楽しみに！！

mission 6 『過去への』

朝。

慌しい里を歩く、一風変わった青年が一人。

ロックオン・ストラトスだ。

「あつ、ロックオン兄ちゃんだ!」

家の手伝いの最中だろうか? 子供の一人がロックオンを指差した。親も一緒にいて、一礼してくるので、ロックオンは笑顔で手を振った。

「よお、しっかり手伝えよ?」

「うん!」

それだけの挨拶を済まして、歩いていく。

彼が教師を始めたあの日から、3日が経った。

教師をすることになった彼が一躍有名になるまで、時を有さなかったのは言うまでも無い。

「さて、今日はどうすつかな」

今日は寺子屋の授業がないので、歩きながら何をするか考えた。

今は朝だ。特に危険な事もないだろうから里を出て外に行こうと思う。

外に出ると慧音がカンカンになりそうだが、大丈夫だろう。

「いざとなりや、戦えないこともねえだろ」

適当にそう言っつて、里の出口を目指して歩いていった。
一波乱が起きそうだ。

さてさて、ロックオンは森を歩いていた。

慧音にもらった地図を見るからに、ただの森だ。

この先にある魔法の森。

さらにそこを抜けた太陽の畑。

誰かが絶対に行くなと言っていた気がする。

どうせ妹紅だろう。

「さて、どうするか」

やって来たは良いが、なにも考えていなかった。

とりあえず時間つぶしのために歩いていただけだ。

目的地も何もなかったので、歩いていたら川にあたった。

「ここらへんで良いか」

川辺にある大きな岩に腰をかける。

流れる川を見て、実感した。

この世界は綺麗で澄んでいる。

今日までも何度も思ったことだ。

自分がいたあそことは違いすぎて、ここに自分が居て良いのか不安

になる。

その手を血で汚した。自分がここにいていいのか？

「たくっ…わかんねえことばかりだ」

そう言って岩の上で寝そべる。

真上にオレンジ色の半霊があつた。

それは太陽の部分を覆う。

「邪魔だよ」

その言葉で、半霊はフワフワと浮いて退いた。

暖かい日の中、辺りの森の音を聞いていると、眠気が襲ってくる。

ソレスタルビーイング時代は眠気なんかで立ち止まっている暇がなかったから、こういう感覚が新鮮だった。

「ふう…」

少し瞼を閉じる。

ものの数分で、ロックオンの意識は途絶えた。

ロックオンが、洋風の家で目を覚ました。
そこは一体どこなんだろうか？
自分はソファで寝ていたようだ。

その部屋にはソファ以外、何も無い。

一風変わったその家は、西暦の、自分が生まれるよりずっと前のような気がする。

部屋を出ると、廊下がだった。

床には紅い絨毯がしかれている。

その絨毯に矢印が描かれている。

ロックオンはわけもわからずその矢印の方向へと歩いて行った。

そして、数分ほど歩くと、大きな扉の前で矢印は途切れていた。
迷わずその扉を開き中に入る。
大きく目を見開く。目の前に居た人物に驚愕したのだ。

「ようこそ」

自分は見たことがあった。

いや、忘れるはずも無い顔だ。

その男の名は――

「イオリア・シュヘンベルグ……」

驚きで、上手く声がでなかった気がする。

だが、目の前の男イオリアはいつもの表情で頷く。

「ガンダムマイスター、ロックオン・ストラトス……座りたまへ」

その言葉で、イオリアと向き合うように並べられた椅子に座った。自分たちのトップの存在を前に、ロックオンは身が固まった。その姿に微笑して、イオリアが言葉をかける。

「楽にしてくれて良い、今はお互い死人……いや、君は半人半霊だったな」

その言葉に、背筋が凍りつくような感じがした。なぜ、このオヤジが知っている？

ただの金持ちではないのか？ 一体戦争根絶のほかに自分たちになにをさせたかったのか？

「まあ、聞きたいことは沢山あるだろう……だが、今は私の話せることだけを聞いて欲しい」

その言葉に、自分は頷くしかなかった。そして、イオリアは語りだす。

「君の戦いは見ていた……ソレスタルビーイングとして、ガンダムとしての役割を全うし……その生を一度終えたはずだった」

「それなのに、俺は第二の人生……半人半霊として幻想郷にきた」

無言で頷く。

イイオリアはロックオンの瞳の奥をのぞくように、強い眼差しで貫く。

正直、そんな威圧感は久しぶりだった。

ロックオンは手に汗が溢れるのを感じる。

「そうだ、私の計画とは違つのだ…君は平行世界へとやってきた」

意味がわからなかった。

幻想郷は、ただの平行世界ではないのか？

「私の予測では、人類が外宇宙に出たところに外宇宙の生命体が人類に襲い掛かる」

なんなんだこのオヤジは？トチ狂つたのだろうか？

だが、信用してはいないわけではない。

なぜなら何世紀も前から、ガンダムを計画し、予測したのだから。

「それと対話する役目が、ガンダムマイスター刹那・F・セイエイ」

「刹那がつ！？」

「そう、彼が真のイノベーターとしての覚醒を果たし…ガンダムの真の力でそれをなす」

イノベーター？対話？本格的に意味がわからなくなってきた。

自分ではついていけないレベルの話だ。

だが、そこでイオリアは話を止める。

「まあ、刹那・F・セイエイのことは良い…私の計画では幻想郷は最期に対話すべき場所なのだ」

その言葉になぜ？と目をイオリアに向けた。

目を瞑って、首を横に振った。

聞くなと言つことだろう。

「だが、君はこの幻想郷にやってきた…だから私は君が半人半霊になる前に独自のルートで君の体にGNDライブを融合させた」

勢いよく椅子から立ち上がると、体のあちこちを触る。

しかし、どこにも違和感を感じない。

どういうことかわからない。混乱する。

「落ち着きたまへ…」

「落ち着けるかよ！」

そう叫ぶ。その瞬間、体が不調をきたした。

視界がブレる。

イオリアが目を伏せる。

「どうやら君と私の対話もここまでだ」

「おい待てよ！」

どんどんと、薄れていく意識。

離れていくイオリアの声。

「また会う機会があれば、話そう…」

その言葉を最期に、ロックオンの意識は途切れた。

ソレと同時に、ロックオンの意識は覚醒した。
あたりは真っ暗だ。自分は昼間居た川辺の岩の上で寝ている。
起き上がったあたりを見回す。

「俺に：GNドライブが？」

次の瞬間、辺りに気配を感じた。
岩から降りて、辺りを見回す。

確実に、複数の視線が自分を狙っていた。
そう、感じるのは明確な殺意。
いや、狩の衝動。

「GAUUUUUUUUU!!」

暗い茂みから、何かが飛び出してきた。
それは、狼の顔をした巨漢。

一体だけではなく、5体ほどだ。
ロックオンを囲むように現れる5体相手に、ロックオンは腰のビームサーベルを抜いた。
ボタンを押し込んで、刃状のビームを出すと、両手でゆっくりと構えた。

イオリアはこれも予言したのだろうか？

だったら、今度絶対に殴る。

そんなことを考えて、幻想郷にきて始めての戦闘を覚悟する。

「ロックオン・ストラトス…断ち切るぜ！」

そう言った瞬間、狼男たちは一斉にロックオンに走りだした。

彼の戦いはここから始まる。

幻想郷での、たった一人のガンダムマイスター！

mission 6 『過去への』（後書き）

あとがき

はい、エイパー・シナプス、じゃなくてイロリアが出てきました。彼はなんだかなんでもありですよ、何世紀も前から金属が攻めてくるって予言して、当てて、彼の思惑どおりなんでしょうかね、全部。

まあ、そんなことはおいておいて、次回初めての戦闘です。お楽しみに！！

mission7『その弾丸は切り裂く』

ロックオンはビームサーベルを構える。

狼の頭をした男。

その一人が走り出した。

その口をロックオンに突き出しながら走り出したが、ガンダムマイスターであり。狙撃手であった彼にはその動きが止まって見える。射線を予測し、ギリギリで避けた。

そして、無防備なその頭を、ビームサーベルで切り裂く。

狼の頭が飛んで、人間の体が倒れる。

「すげえ、まるでバターみてえに切れる」

初めて自らの手で扱ったそれに、驚愕した。

狼の一匹が遠吠えをする。

ソレと共に、他の狼も吠えるのだった。

走り出す狼男三匹。

だが、ロックオンには恐れなどない。

もう一方の手でビームサーベルを抜くと、外側から内側に振り、二匹を切り裂いた。

首が吹き飛んで血が噴出す。

そして、もう一匹。

「断ち切るぜっ！」

右手のビームサーベルをホルダーにしまつて、左手のビームサーベルを両手で持つ。

さらに走ってくる狼男を待った。

目の前で、腕を振り上げ、降ろそうとした瞬間動く。

降りてくる腕を、肘から切り裂く。

そして攻撃を止めてから、ビームサーベルを引いて、狼男の左胸に突き立てた。

「……はあっ！」

左に斬り抜くと、狼男は言葉を発すことなく倒れる。
ロックオンはビームサーベルのビームを消滅させて、持つ。

「あと一匹は……」

その瞬間、右になんらかの感覚がした。

頭から抜けていた。敵は五体。

そして、見えない右から気配を消して迫ってきたコイツはおそらく。

「ちいっ！」

大物だ。

雄たけびをあげながら腕を振り上げていた。

だが、所詮は動物ということだろう。

「もつと静かにきやがれ！」

柄を狼頭の顎に当てる。そして、ボタンを押し込んだ。
その瞬間狼男は全ての活動を止めた。

ビームを消して、狼男の体を蹴り飛ばす。

「ハアツ…はあつ…」

肩で呼吸をしながら、柄をホルダーにしまう。

右目につけている眼帯に手を当てる。

死んでいた。確実に、頭の良い相手であれば死んでいた。

そう考えて、このままではいけないと思う。

そう、左を使わなくてはいけない。

ついでに右の方は感覚で掴まなきゃいけなかった。

戦闘訓練というものもおかなければならないのかもしれない。

溜息をついて、石の上に座りこんだ。

休憩には丁度良い。上空に上っている満月を見て、笑みがこぼれる。

妹紅が、森を走っていた。

村で少しだけ騒ぎになっている。

ロックオンが帰ってこない、彼が森に向かったとだ。

たった3日でここまで村人に溶け込めたことに、驚いた。

だがそれ以上にロックオンが心配だ。

自分の数少ない友達なのだから――

数十分走り続けて、ようやく見つけた。

彼は岩へと腰をかけて、満月を見ているようだ。
安堵の息を吐いて、彼の元へと歩く。

「ロックオン！」

結構大きめの声で呼ぶが、彼は見向きもせずに満月を見ている。

「ロックオ——」

「よお……」

どうやら聞いてはいたようだ。

彼はいつもとは違い。真剣な顔で満月を見ていた。

「どこもかわんねえなあ、月はさ」

その言葉にどういう意味がこもっているのかは知らない。彼の表情は何を考えているのか読めない。
だが、一つ。妹紅は送る言葉があった。

「っ……この馬鹿！」

その一言を発した瞬間、ロックオンは驚いたような表情で妹紅を見る。

妹紅は周りを見る。

狼頭の妖怪の死体。

全て、ロックオンがやったことは明白だ。

「なんで、倒せた？」

「俺も戦えるってことだ」

そう言っつて、岩を降りると、妹紅の肩を叩いて歩き出す。
帰り道へと足を進めるロックオンについていく妹紅。

「おい、どういうことだよ！」

「そういうこった」

そう言っつてはぐらかすロックオン。

堪忍袋の緒を切らした妹紅が、彼の襟首を掴む。

ぐえっ、と蛙がつぶれたような声と共に、離れた。

咳き込むロックオン。

「あたしや慧音、村の人たちがどんだけ心配したと思っつてんだよ！」

その言葉に、ロックオンが驚いたような表情を見せる。

妹紅は本気で心配して、本気で怒っていた

それを理解して、罰の悪そうな顔をする。

「ああ…悪かった」

素直に謝ると、妹紅の頭を撫でた。

肩で息をしている彼女の頭を撫でていると、手を払われる。

そんなことをされるのが無いせいで、少し赤くなっていた。

まあ、友人にそんなことをされれば恥ずかしがるのも当然だろう。

「行くよ」

その言葉で、歩いていく妹紅。

ロックオンは苦笑すると煙草を出して口にくわえた。
ポケットを調べるが、いれていたマッチが見当たらない。

「どうした、ロックオン？」

立ち止まって、聞く。

ロックオンがお手上げと言う風に手を上げる。

苦笑して、妹紅はロックオンの近くへと寄ると手を出す。

「オーライ、ほら」

煙草を一本、妹紅に手渡す。

それをくわえて指の炎で火をつけると、妹紅が自分の煙草を近づけてくる。

その煙草に、煙草をくわえたまま近づける。

二人の煙草の先端が触れ合うと、ロックオンの煙草にも火がついた。

顔を見合わせて笑い合い、黙って歩き出す。

煙草の匂いを残して、二人は歩き出した。

村に帰ると、たしかに小さくも騒ぎになっていた。

心配してくれる人が沢山居て、不謹慎ながら嬉しくなってしまったのは内緒だ。

慧音は今日は体調が悪いらしい。満月の夜はいつもこうだとか？

謝って、騒ぎがやむと妹紅と共に自宅へと帰って来た。

「だあゝ疲れた！飲むぞ飲むぞ！」

村についた時にもらった酒を持って、妹紅が言う。

呆れながらも、今日はそんな気分だったロックオン。

イオリアへのぶつけようの無い怒りを発散するには飲むしかなかった。

「それには賛成だ、飲んで嫌なこと全部忘れちまおう」

二人で居間に向かう。

ロックオンがお猪口を持って行くと、既に蓋を開けていた妹紅が、注ぐ。

二人が座って、お猪口を持ち端をぶつける。

「乾杯！」

「乾杯！」

二人で同時にまず一杯。を飲み干す。

疲れた体に、アルコールが染み渡った。

「五臓六腑に染み渡るって奴だ！」

妹紅が再び追加する。

苦笑してロックオンももらうが、二杯目からはゆっくりと飲む。

だが、妹紅は自重無く飲み続けている。

「つぶはあっ！！」

また飲んだ。妹紅だけで酒瓶何本にあたるだろう？

とりあえず3本は彼女一人で飲んでいる。

もともと日本酒には縁が無かったロックオンは、少しずつ飲んでいった。

「ほらほら！もつとのまないと飲んじゃうぞ！」

「あ、あぁっ…わかってる」

まいったという風に笑うロックオン。

だが、楽しそうに飲んでいる妹紅を見ると良いか、と思えた。

明日も休みだ。どうしようか？

あまり他人には迷惑をかけないようにしようと思う半分。冒険心
のほかに動いた。

mission7『その弾丸は切り裂く』（後書き）

あとがき

長らくお待たせしました！

最新話です！今回はつなぎですね、次回東方キャラがまた一人！
お楽しみに♪

P S

AGEなんて知らない！そんなことよりオリジンアニメ化おめでと
う！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6324t/>

東方撃射伝～ロックオンが狙い撃つ～

2011年6月25日06時59分発行